

# 音楽科学習指導案

日時 平成28年5月19日（木）第1・2校時

対象 3年3組（男子20名 女子20名 計40名）

指導者 教諭 徳 永 賢 子

## 1 題材 「伝える合唱」

## 2 指導目標

- (1) 曲想や声部の役割と全体の響きに関心をもたせ、合唱の学習に主体的に取り組もうとする態度を育てる。
- (2) 音楽を形づくっている要素を知覚・感受しながら、曲想を味わい、声部の役割と全体の響きとの関わりを理解して音楽表現を工夫させ、どのように歌うかについて思いや意図をもたせる。
- (3) 曲想や声部の役割と全体の響きを生かした、曲にふさわしい音楽表現をするために必要な技能を身に付けて歌わせる。

## 3 題材の評価規準

- (1) 曲想や声部の役割と全体の響きに関心をもち、合唱の学習に主体的に取り組もうとしている。
- (2) 音楽を形づくっている要素を知覚・感受しながら、曲想を味わい、声部の役割と全体の響きとの関わりを理解して音楽表現を工夫し、どのように歌うかについて思いや意図をもっている。
- (3) 曲想や声部の役割と全体の響きを生かした、曲にふさわしい音楽表現をするために必要な技能を身に付けて歌っている。

## 4 教材

「ふるさと」(高野辰之 作詞 / 岡野貞一 作曲 / 黒部美樹 編曲)

## 5 題材について

### (1) 題材設定の理由

知性と感性のバランスがとれた人間性を培うことは常に教育に求められている。音楽の学習を通して音楽の感性を豊かにするためには、その音楽固有の表情や味わいに関心をもち、曲にふさわしい自己のイメージや感情を広げ、思いや意図をもって表現を創意工夫する学習を積み重ねることが必要である。合唱にどのような思いを込めるか、その思いをどのように表現して伝えることができるか課題を設定し、めざす音楽を創造する活動を通して、学習指導要領の第2学年及び第3学年の目標と、内容A表現(1)ア「歌詞の内容や曲想を味わい、曲にふさわしい表現を工夫して歌うこと」ウ「声部の役割と全体の響きとのかかわりを理解して、表現を工夫しながら合わせて歌うこと」を実現したいと考え、本題材を設定した。また、学習指導要領では、合唱や合奏など、全員で一つの音楽を創っていく体験を通して、表現したいイメージを伝え合ったり、共同する喜びを感じたり

する指導を重視することが示されている。音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す曲想や魅力を生かして、協働で表現を工夫することを柱にし、音楽への思いをもち、音楽の魅力伝えるにはどう表現すればよいか試行錯誤し合う活動を通して、本題材を進めていきたい。

## (2) 教材について

「ふるさと」は、大正時代に発表されて以来、長く歌い継がれている文部省唱歌である。旋律の美しさやどこか懐かしい日本的な歌詞の情感がこの曲の大きな魅力となり、多くの日本人に愛されている。小学校6年生の共通教材であることから、ほとんどの生徒が既習しており、親しみやすく、主体的にアンサンブル活動に取り組むことができると考える。1番はふるさとの豊かな情景を、2番は人々を、3番は帰郷の願望を歌っており、イメージを膨らませつつ、合唱の響きにのせて表現を工夫していく教材として適した曲である。今回は混声三部合唱に編曲された楽譜を使用するが、ソプラノから男声に主旋律を移行させたり、オブリガートを効果的に響かせたりするなど、シンプルな旋律をより美しく、印象的な曲に編曲されており、声部の役割と全体の響きとの関わりを理解させやすい。また、間奏とコーダを含んだ編曲になっており、音楽の構成も工夫させることができる。生徒がより能動的・意欲的に楽曲との関わりをもつとともに、音楽を表現することの達成感や成就感を味わい、より多様な音楽へと視野を広げていくことができる教材である。

## (3) 生徒の実態について

今回の学習に取り組むに当たって、生徒の音楽に対する実態の一面を知るために、次のようなアンケートを実施した。(4月7日 男子20名 女子20名 計40名 実施)

### 1 グループで「ふるさと」を高めていくことについて

楽しみ (11名)・どちらかという楽しみ (13名)・どちらかという不安 (13名)・不安 (3名)

#### [[「楽しみ・どちらかという楽しみ」の理由]]

- ・ 協力して少しずつ音楽を仕上げていくのが楽しい
- ・ グループの仲間に分からないところを教えてもらえる
- ・ 自分とその他の人の音の重なりを聴くのが楽しみ
- ・ いろいろな意見を出し合ってよりよい音楽を創れる
- ・ 少人数だから音の重なり具合などをチェックすることができる
- ・ 小学校では斉唱だった「ふるさと」を合唱にできる
- ・ 「ふるさと」が好き
- ・ 以前のグループ活動(器楽アンサンブル)が楽しかった
- ・ 互いにアドバイスをし合いながら練習できる

#### [[「どちらかという不安」の理由]]

- ・ 同じパートが少ないから自分の音が正しいか不安
- ・ グループ内で音が合うか不安
- ・ 自分のパートに責任をもたなければならない
- ・ 新しいクラスのメンバーとうまくやっていると分からない
- ・ 高音が出ないのでみんなに迷惑をかけてしまう
- ・ 正しい音程で歌えない

### 2 表現活動に取り組むときに、音楽の魅力伝えることについて

いつも意識している (3名)・時々意識している (23名)・あまり意識していない (14名)

#### [[音楽の魅力伝えるために気を付けていることや実践していること]] (複数回答)

- ・ 強弱の変化 (10名) ・ 表情 (7名) ・ 歌詞の意味 (4名) ・ ハーモニー (3名)
- ・ 作詞・作曲者の思い (3名) ・ 他のパートとのつながり ・ 音色 他

#### [[あまり意識していない理由]]

- ・ 歌うことで精一杯 ・ どのように魅力を伝えればよいか分からない
- ・ 人前で何かすることが恥ずかしい

本校は、朝の会・帰りの会で毎日歌う習慣があり、文化祭や卒業式等の行事でも合唱に取り組むことから、合唱活動に親しんでいる生徒が多い。本学級の生徒も朝の会・帰りの会や授業で伸び伸びと歌っている。しかし、今回の学習を進めるに当たっては、4割もの生徒が「どちらかという不安、または不安」と答えている。理由として、高い音が出ない、音が取れないなど技能面での不安と、新しい学級の友人関係についての不安が挙げられる。生徒は、これまでに器楽アンサンブルや創作活動など協働で音楽を創り上げる活動を経験しているが、歌唱によるアンサンブルは今回初めての取組であるため、技能面の不安を感じる生徒が多いと考える。パート練習や個別指導を丁寧に行うことで、技能面の不安要素を解消したい。グループ活動については、これまで本校が協働的な学習を進めている成果もあり、多くの生徒が協力して取り組もうとする雰囲気がある。グループでめざす音楽について話し合い、練習を重ねることで友人関係も円滑になり、心を開いて音楽づくりに取り組んでいくことが期待される。

また、音楽の魅力を伝えることについては、半数以上の生徒が意識していると答えており、具体的に気を付けていることは、強弱の変化や表情、歌詞の意味を考えることを多く挙げていた。本題材を通して、声部の役割や全体の響きについて理解させることで、より広い音楽表現の工夫につながれると考える。

#### (4) 指導に当たって

- 生徒の実態を踏まえ、本題材を扱うに当たり、次のようなことに留意して学習を進めていきたい。
- ア 「ふるさと」の魅力を台湾の姉妹校の生徒に伝えることを目標に、めざす音楽について考えさせたり、自己評価や相互評価に取り組ませたりして、学習に対する能動的な態度を育てたい。
- イ グループで、曲の魅力が伝わる表現に向けて試行錯誤する活動を通して、合唱のよさを味わわせ、友達と共に音楽を創り上げる喜びを感じさせたい。
- ウ パート練習の中で、豊かな発声や正しい音程・リズムによって、美しい響きが生まれることを確認し、基礎的な表現の技能を高めたい。
- エ 授業を振り返らせる自己評価カードを記入させることによって、個の進捗状況やつまづきを見取り、個の支援に生かしたい。

## 6 指導計画（全5時間）

時	主な学習活動	教材	単位時間における評価規準		
			音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
1	1 楽譜から、特徴を話し合う。 2 範唱を聴く。 3 主旋律を歌う。		曲に関心を持ち、学習に主体的に取り組もうとしている。	テクスチュアや構成を知覚し、その働きが生み出す雰囲気を感受している。	読譜の仕方を身に付けて表現している。
2	1 各パートを音程とリズムに気を付けて移動で歌う。 2 部分的に合唱をする。	ふるさと	音色や声の重なり、響きに関心を持ち、主体的に合唱表現に取り組んでいる	音色や声部の役割と関わり方を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受している。	曲にふさわしい音楽表現をするために必要な発声、発音などの技能を身に付けて歌っている。
3	1 グループに分かれてめざす音楽について話し合う。 2 課題を設定し、表現を追求する。		グループで表現を工夫する学習に主体的に取り組もうとしている。	イメージとかかわらせて音楽表現を工夫し、どのように演奏するかについて、思いや意図をもっている。	曲にふさわしい音楽表現をするために必要な、技能を身に付けて歌っている。

4 (本時①)	1 相互発表・相互評価をする。 2 評価を基に、めざす音楽と課題を再考し、「ふるさと」の魅力が伝わる表現を追求する。	ふるさと	表現を工夫する学習に主体的に取り組み、相互発表・相互評価を自分たちの演奏に生かそうとしている。	曲想を味わい、声部の役割と全体の響きとの関わりを理解して音楽表現を工夫し、どのように演奏するかについて、思いや意図をもっている。	他の声部を意識しながら、曲にふさわしい音楽表現をするために必要な、技能を身に付けて歌っている。
5 (本時②)	1 相互発表をする。 2 グループで追求した表現の工夫を全体合唱に生かす。		めざす「ふるさと」に近づくための表現を工夫する学習に、主体的に取り組もうとしている。	評価を基によりよい表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもっている。	思いや意図を伝える表現の技能を身に付けて歌っている。

## 7 本時の実際

### (1) 授業設計上の工夫

#### ア 創造的な学びを行わせるための場の設定の工夫

題材の前半において、姉妹校である台湾の大直中学校の生徒に演奏を披露するに当たって、どのような合唱をつくりたいか、思いをまとめ、パート練習を経て、全体で合唱に取り組んでいる。合唱が形になった段階でめざす音楽について再考し、グループで伝えたい「ふるさと」の魅力を話し合い、魅力を伝える表現の工夫を追求する活動を行う。本時①では、グループの追求した表現を互いに発表し、評価する場を設定した。試行錯誤して創り上げた音楽を互いに聴き合い、評価することで音楽に対する価値意識が広がり、めざす音楽に向けて更に表現を工夫しようとする意欲が高まると考える。本時②では、評価を基に自分たちの音楽を分析し、問題を見いだして更なる課題の解決に向けて学習を展開させる場面を設定した。

#### イ 創造的な学びを充実させる指導と評価の工夫

##### (ア) ICEモデルを用いた指導と評価の工夫

ICEモデルを基にルーブリックを作成し、指導と評価に活用する。このルーブリックを基に、学びの段階を確認しながら、めざす音楽に向けて、能動的に学びの質を高めていくことが期待できる。本時は、グループごとに考えたルーブリックを加えたものを生徒と教師が共有し、問題発見と次の課題設定を導き出すために役立てたい。

##### (イ) 形成的評価の工夫（評価表とワークシートの関連）

ICEモデルによるルーブリックを基にした評価表を作成し、題材の前半で自己評価として活用している。客観的に自己の学習状況を確認し、自己課題を明らかにしながら次の学習に能動的に取り組ませることをめざした。本時①では、ワークシートと関連した相互評価表を作成し、グループで表現を工夫する場と相互発表・相互評価の場に活用させる。評価する項目を選ばせることで、個の学びの段階を見取ることができる。本時②では、終末に今回の学習をふり返り、各自の成長や課題をワークシートにまとめさせる時間を設定し、今後の学習への意欲をもたせたい。

##### (ウ) 発問の工夫

相互評価の結果から、問題を見だし、解決に向けて学習活動を吟味する場面で、ICEモデルを活用した発問を行う。学びのレベルに沿った発問は、学びの質を高め、音楽づくりの話合いを活性化させることができると考える。

### (2) 本時①の指導目標

ア 表現を工夫する学習に主体的に取り組ませ、相互発表・相互評価を自分たちの演奏に生かせるようにする。

イ 曲想や声部の役割と全体の響きとの関わりを理解して音楽表現を工夫させ、どのように演奏するかについて、思いや意図をもたせる。

ウ 曲にふさわしい音楽表現をするために必要な技能を身に付けさせる。

### (3) 本時①の評価規準

ア 表現を工夫する学習に主体的に取り組み、相互発表・相互評価を自分たちの演奏に生かそうとしている。

イ 曲想を味わい、声部の役割と全体の響きとの関わりを理解して音楽表現を工夫し、どのように演奏するかについて、思いや意図をもっている。

ウ 他の声部を意識しながら曲にふさわしい音楽表現をするために必要な技能を身に付けて歌っている。

(4) 本時①の展開 (4/5)

過程	時間	主な学習活動	形態	指導上の留意点 (◆は評価の観点)
導入	5分	1 ウォーミングアップを行う。 2 前時までの学習内容をふり返り、本時の目標と学習の流れを把握する。 「ふるさと」の魅力を伝えるにはどのような方法があるだろうか	一斉	○ 明るい雰囲気をつくりながら、伸び伸びと歌わせる。 ○ 本時の目標と学習の流れを理解させる。 ・ 本時は、グループで追求した表現の工夫を発表し、互いに聴き合い、その評価から問題を発見し、解決法を考えてよりよい音楽につなげていくことを理解させる。
展開	5分	3 グループごとに表現の工夫を確認し、練習する。	グループ	○ 事前にまとめていた発表内容をグループで確認させる。 ○ ワークシートの評価表を活用させて、自分たちの表現の工夫を確認させる。 【教科論6(2)アイ】 ◆ 評価イ・ウ
	15分	4 グループごとに発表し、互いの評価をする。 ① 魅力を伝えるために工夫したことを説明し、演奏する。 ② 演奏を聴き、評価を行う。	グループ 個人	○ 相互評価表を配布し、記入の仕方について説明する。 ○ 曲の魅力を伝えるために工夫したことを説明した後、演奏させる。 ◆ 評価ア・イ・ウ ○ よりよい音楽を創るために、評価項目を選ばせ、客観的な評価を行わせる。 【教科論6(1)(2)アイ】
	20分	5 相互評価の結果を分析し、めざす「ふるさと」に向けて表現の工夫を考える。	グループ	○ 相互評価の結果を分析し、自分たちの問題と解決法を発見し、次の課題を設定するための話し合いをさせる。 ○ グループごとに学びの段階に沿った発問をし、話し合いの活性化を促す。 【教科論6(2)ウ】 ○ 発見した問題点や解決策、次の課題等を、グループごとに記入させ、考えを整理させる。 ○ 実際に表現をさせながら解決策を検討させる。 ◆ 評価ア
終末	5分	6 グループごとに話し合ったことを発表する。 7 次時の予告を聞く。	一斉	○ 話し合った内容を共有し、新しい視点として次時の学習に生かせるようにする。 ◆ 評価ア ○ 次時は話し合ったことを基に、表現を更に追求していくことを伝える。

(5) 本時②の指導目標

- ア めざす「ふるさと」に近付くための課題解決に主体的に取り組ませる。
- イ 評価を基によりよい表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもたせる。
- ウ 思いや意図を伝える表現の技能を身に付けさせる。

(6) 本時②の評価規準

- ア めざす「ふるさと」に近付くための表現を工夫する学習に主体的に取り組もうとしている。
- イ 評価を基によりよい表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもっている。
- ウ 思いや意図を伝える表現の技能を身に付けて歌っている。

(7) 本時②の展開 (5/5)

過程	時間	主な学習活動	形態	指導上の留意点 (◆は評価の観点)
導入	3分	1 前時の学習内容をふり返り、本時の目標と学習の流れを把握する。 台湾の姉妹校の生徒に「ふるさと」の魅力を伝えるためには、どんな演奏をすればよいだろうか	一斉	○ 本時の目標と学習の流れを理解させる。 ・ 本時は、前時に話し合った課題の解決に向けて学習を展開し、めざす「ふるさと」に近付けることを理解させる。
展開	22分	2 グループごとに課題を確認し、表現の工夫を追求する。	グループ	○ リーダーを集合させ、学習の進め方を確認する。 ○ 他グループの表現の工夫も参考にさせる。 ○ グループの学びの段階に沿った発問をし、創造的な学習の充実を促す。 ◆ 評価ア・イ 【教科論6(1)(2)ウ】
	15分	3 グループごとに発表し、互いの評価をする。 ① 更に工夫したことを説明し、演奏する。 ② 演奏を聴き、評価を行う。 ③ 気付いたことを発表する。	グループ	○ よりよい表現のために更に加えた工夫や参考にしたグループの表現方法などを説明させる。 ○ この曲を初めて聴く人にどのように伝わるか考えさせる。 ○ 相互評価表のE段階の項目について評価させる。 ○ 前時の発表と比べて、向上したことなど気付いた点を発表させる。 ◆ 評価ア・イ・ウ 【教科論6(1)(2)アイ】
	5分	4 全体で合唱をする。	一斉	○ グループで工夫したことを全体の合唱に生かし、まとめの合唱をさせる。 ◆ 評価ア
終末	5分	5 「ふるさと」の学習をふり返る。	一斉	○ 自己の成長と課題を見つめさせ、今後の学習に生かせるようにする。 ◆ 評価ア・イ 【教科論6(2)イ】

て捉えることができている。その課題点についても具体的に捉えることができた。また、付箋紙に書かれている内容の中には、②、④のように、すでに具体的な改良案を書いている生徒もいた。このことは、情報を集めるIの段階、情報をつなげるCの段階、新しい提案をするEの段階がスムーズに行われていると捉えることができる。こ



写真8：生み出したアイデアを説明する様子

この活動の中では、特に新しい具体案を書かせる指示はしていないため、生徒たちの自然な思考の中で生み出されたものである。この一連の思考の流れを繰り返させることで、自らの学習過程に自らが課題を見だし、その解決に向けて更に学習を進めるという能動性を引き出すことができるのではないかと考える。本授業においても、生徒たちのアイデアに変容が見られ、生徒たちのコミュニケーションは一層活発になり、能動的な学びの姿を見ることができた。

## 8 研究の成果と課題

### (1) 研究の成果

- ・ 協働型の学習課題の設定をすることによって、自分と他の人の意見を比較しながら考えさせる発想の仕方を身に付けさせることができ、独自の見方や考え方を培うことにつながった。
- ・ チェック&アチーブボードなど、思考を整理して考えさせる教具を開発することによって、情報を明確に共有しながら形成的な評価をさせることができ、根拠のある理想と課題を見いだすことにつながった。
- ・ 新たな理想と課題を見いださせるための形成的評価の工夫を行うことで、メタ認知的な思考をさせることができ、能動的な学習の活性化につながった。

### (2) 研究の課題

- ・ 授業の中で高められている、もしくは、発揮されている「創造的に考える力」や「創造的に考えようとする態度」とICEモデルによる形成的評価との関係について、更に研究を進めていく必要がある。
- ・ 生徒自身による形成的評価の基準の変容や価値意識の形成過程を継続的に記録、分析し、より効果的な形成的評価の手立てについて、更に研究を進めていく必要がある。

### 〈参考文献〉

- |                |                                    |
|----------------|------------------------------------|
| 文部科学省          | (2008)『中学校学習指導要領解説 美術編』            |
| 田村 学, 黒上晴夫     | (2013)『考えるってこういうことか!「思考ツール」の授業』    |
| 鈴木敏恵           | (2012)『プロジェクト学習の基本と手法』             |
| 北尾倫彦 小泉 薫      | (2012)『観点別学習状況の評価規準と判断基準 中学校美術』    |
| 鹿児島大学教育学部附属中学校 | (2013~2015)『自らよりよい未来を創る生徒の育成1~3年次』 |

### 研究 同 人

濱川 達一 (指宿市教育委員会へ転出)	三浦 祐成 (非常勤講師)
前之園 礼央 (吹上中学校より転入)	